

Efficacy of pregabalin in neuropathic pain in paediatric oncological patients

Petr Vondraceka, Hana Oslejskova, Tomas Kepak, Pavel Mazanek, Jaroslav Sterbab, *European journal of paediatric neurology* 13:332-336(2009)

目的

小児固形癌や白血病に対し、神経障害性疼痛を誘発する化学療法を行っている患者のプレガバリンの効果と安全性を評価する。

対象と方法

小児固形癌患者 21 人、小児白血病患者 9 人の末梢神経障害を誘発する化学療法を受けている 30 人（男の子 11 人、女の子 19 人、年齢は 10～17 歳で平均年齢は 13.5 歳であった）に服用させた。

患者の受けている化学療法は白金製剤やビンアルカロイドを使うスタンダードな化学療法である。

精神的に不安定な患者や、血液データが異常値の患者、腎機能、肝機能が低下している患者は除外した。

子供たちはプレガバリン単独を 1 日に 2 回、1 日量として 150mg～300mg（平均用量は 225mg）を 8 週間内服した。75mg で開始し、1 日量として 150mg～300mg になるように患者の体重や臨床効果に応じて投与量は決定された。プレガバリンを内服しているときに化学療法を行った患者はいなかった。

痛みの評価は VAS を用いている。プレガバリン投与前、2、4、6、8 週間後に評価された。

結果

30 人の患者のうち 28 人（93%）が 8 週間継続してフォローアップできた。2 例はコンプライアンス不良のため、評価が不可能であった。患者の人口統計とベースラインの評価を表 1 に示している。

VAS スコアは平均でベースラインから 59%減少した。

奏功率は 150mg 群が 65%、225mg 群が 77%、300mg 群が 88%であった。

プレガバリンによる治療は痛みに対し統計的に有意な改善（p 値が 0.001 未満）となった。

副作用は軽度もしくは中等度で一般的に一過性の副作用が 4 人（14%）に起こった。

考察

プレガバリンは化学療法誘発性神経障害の痛みを減少させるのに劇的に効果的であった。治療は痛み症状に対し、すぐに効果を発揮した。

この結果は成人患者に対して行ったトライアルと比較すると、小児患者に対して行った結果のほうがより有意であった。これは小児のほうが中枢神経のシステムにおいて薬剤の効き方がとても敏感であることが分かる。

副作用は軽度でかつ一時的であったがめまいは認められなかった。成人では鎮静とめまいがプレガバリンの使用によって起こることが知られている。これにより、小児のほうがめまいに対して認容性があるであろう。

神経因性症状の痛み以外の知覚異常はプレガバリンによって改善することはできなかった。これらの改善することができなかった症状や、他の薬剤のメカニズムはさらに研究する必要がある。